おらほの誇り“津軽弁”　つがる市津軽弁フォーラム

「つがる市津軽弁フォーラム2012」が11月10日、松の館で開催され、市民ら約250人が古里の言葉の良さを再確認しました。これは、地域交流の機会が増える昨今、「津軽弁」のあり方について考えようとNPO法人つがる野文庫の会（平川智枝子理事長）が主催。基調講演とパネルディスカッションを通して地域の文化としての津軽弁についてさまざまな角度から語り合いました。

基調講演「たかが津軽弁、されど津軽弁」

青山　良平 氏（青森放送パーソナリティ兼ディレクター）

私自身、最初はテレビでは標準語を使っていたが、友人から「おもしろみがない」と言われ、全国放送でも津軽弁で話すようにしたところ好評だった。全国の津軽地方出身者から「津軽弁が懐かしく聞き入ってしまった」との手紙が届いた。

ボルネオ島にロケに行ったとき、通訳の言葉が通じず、たまらず津軽弁で話したら、ニュアンスが通じたという経験もある。

津軽弁でなければ表現できない感情や状況もある。観光客や地元以外の人に津軽弁はわかりにくいと思われているが、気持ちを込めてゆっくり話せば通じるはず。迎える気持ちを大切に自信と誇りをもって使っていこう。

パネルディスカッション「地域を愛し、人を表す言葉・方言を考える」

三戸　靖史 氏（向陽小学校ＰＴＡ会長）

学校では西北五地域の先生が多いので津軽弁が主体だが、教科書を読むときや作文はもちろん標準語で、使い分けはできている。県外出身の先生は基本的に標準語を使っている。核家族化とともにイントネーションだけが津軽弁という子どもも増えてきた。私も津軽弁。今日、皆さん津軽弁が好きなことを確認できて安心した。

白戸　明子 氏（青森県企画調整課）

県民アンケートの結果、青森県民は「なまりが強い」イメージが高いものの、恥ずかしいと思っている人は少なく、約９割の人が「方言を残していきたい」と思っているという結果が得られた。県全体で方言に対する愛着を共有できれば発信力が全然違ってくる。津軽と南部で言葉の意味の違いによる誤解を解いたり、自分たちだけでなく、みんなが理解できるよう津軽弁も共通語も共生していければ、これからも存続していくだろう。

長瀬　公秀 氏（つがる市役所総務課）Ｉターン者

訛って聞き取れないのと、「あぐど」（かかと）など単語が違ってわからないの両方で、最初は津軽弁で苦労したが、少しずつ自然に耳に入るようになった。津軽弁はインパクトが強いので地域間交流に役立つ。ただあまりにも違いすぎるので、わからない人がいれば通訳するなど気配りが必要。津軽には伝承すべき地域固有の文化がたくさんあり津軽弁もその一つ。大切な地域の宝だと思う。

伝統胸に飛躍を誓う　向陽小創立140周年記念式典

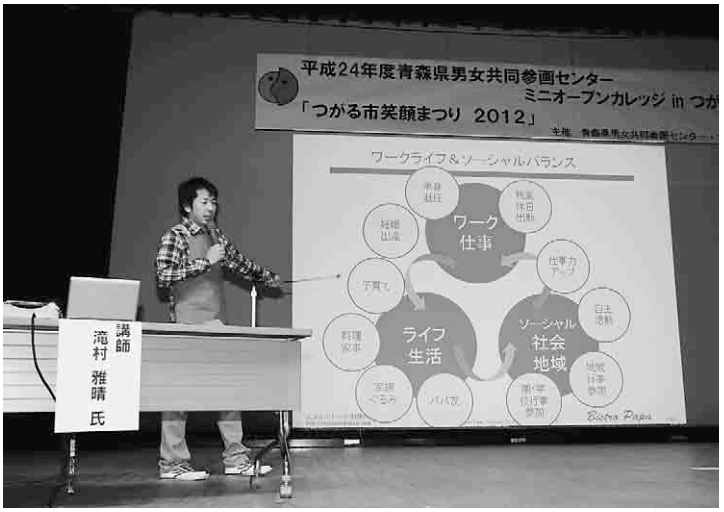
創立140周年を迎える向陽小学校（阿彦正弘校長）の記念式典が11月４日、同校体育館で行われ、全校児童と保護者ら約420人が伝統を胸にさらなる飛躍を誓いました。

同校は、明治６年に慶応寺私塾「時習学舎」を「木造小学校」と改称して創立、昭和21年に学制改革により「向陽小学校」と改称されました。今年度から新校舎と新体育館を使用し、286人の児童が在籍しています。

式典では阿彦校長が「学校を支えてきて頂いた皆様へ感謝するとともに、将来に向かって何か一つ心に決意するものをもってください」と式辞。福島市長の祝辞に引き続き、三戸靖史実行委員長が記念品として、同校ＯＢのねぶた制作者の竹浪比呂央さんが作った「ねぶた面」を披露しました。最後に全校児童が出席者とともに校歌を斉唱し節目の日を祝いました。

元気に校歌を斉唱する児童たち

家族みんなで幸せ笑顔を　つがる市笑顔まつり



自身の体験を交え「パパ料理」について語る滝村さん

命の尊さや思いやりを男女共同参画社会推進の視点でともに考える「つがる市笑顔まつり」が11月11日、松の館で開催されました。会場では、県男女共同参画センターのミニオープンカレッジとして、パパ料理研究家の滝村雅晴氏による講演が行われました。

滝村さんは「『パパ料理』とは、自分が食べたいものを自分の都合で作る趣味の料理ではなく、自分のお腹が減っていなくても家族のために作るパパの家庭料理。時間やお金をかけすぎず、買い物、片付けまで行うことが大切。パパ料理の実践は、家族の幸せだけでなく、思いやり社会の実現にも結び付く」と話していました。

また、ベビーマッサージなどの講座も行われ、訪れた市民らは家族の触れ合いを楽しんでいました。

学ぶ意欲いつまでも　つがる市長寿大学閉校式

平成24年度つがる市長寿大学閉講式が11月９日、松の館で行われ、163人の“学生”が修了しました。今年度は体と脳のトレーニング、食品科学や更年期障害などの健康講座、津軽三味線鑑賞など幅広い内容で計７回の講座が開催されました。

閉講式では、学長の葛西教育長が各地区の代表者に修了証書を手渡し、「長寿大学で学んだことを家族や子どもたちに伝え学習効果をより向上させてください」とあいさつ。福島市長が「仲間との交流を大切にしながら地域を支える一員としてさらに教養を高めてください」と祝辞を述べ、最後に小山内兼一運営委員長が「これからも何事にも関心を持ち、学ぶ意欲と行動力を持ち続け社会発展の役に立ちたい」と学生代表の言葉を述べました。

修了証書を受け取る長寿大学の学生

全国産業用無人ヘリ競技大会で準優勝

全国産業用無人ヘリコプター飛行技術競技大会（11月２日、茨城県水戸市）で越水無人ヘリ防除組合（長谷川正一組合長）の長谷川英世さん・吉田源貴さん組が準優勝を果たし、福島市長に報告しました。

競技は、２人１組で１人が操縦者、１人が離れた場所から合図を送る役割を担い、飛行の安定度や散布液噴出の精度などを競うもので、同大会には82チームが出場しました。

長谷川さんは「着陸時にバランスを崩したが準優勝できて良かった」、吉田さんは「緊張はしなかった。普段から着陸に気を付けて来季に向けて練習する」と大会を振り返り、長谷川組合長は「事業散布にも反映させてこれからも頑張ってもらいたい」と話していました。

準優勝に輝いた長谷川さん(左から２人目)、吉田さん(中央)

LED防犯灯を寄贈する吉沢会長(左)

地域の防犯に役立てて

青森県西部郵便局長会（吉沢隆治会長）と同夫人会（吉沢康子会長）が10月27日、市役所にLED防犯灯70台を寄贈しました。

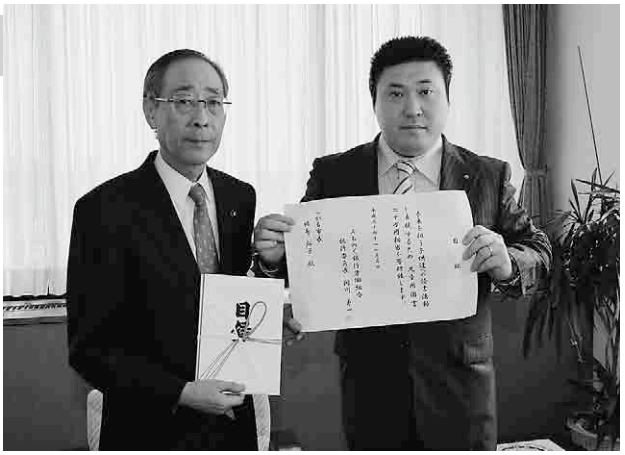
森田農村環境改善センターで行われた贈呈式では、吉沢会長が「このLED防犯灯を設置し、夜でも安心して歩けるよう、防犯に役立ててください。これからも地域に根差した郵便局として努めて参ります」とあいさつ。佐藤副市長は「現在つがる市には約6500灯の防犯灯があります。地域の安全、安心のため、こんなにたくさん寄贈していただき感謝に堪えません」とお礼の言葉を述べました。

みち銀労働組合が図書費を寄贈

11月５日、みちのく銀行労働組合（関川勇一執行委員長）が子どもたちのために役立ててもらおうと、市に児童図書の購入費として20万円を寄付しました。

これは、地域貢献を目的に平成８年の組合結成20周年を機に始めた奉仕活動で、年２回のボーナス支給時に行員から募金を募り、寄せられた善意を児童図書購入費として県内市町村に寄贈しているものです。

この日、市役所を訪れた関川委員長は「将来を担う子どもたちの知識や教養を高めるために活用してください」と福島市長に目録を手渡すと、福島市長は「本当に助かります。ありがとうございます」とお礼を述べました。


目録を手渡す関川委員長(右)

市役所を訪れ職員をねぎらう園児たち

毎日のお仕事ご苦労さま

勤労感謝の日を前に11月２日、木造西幼稚園（吉田節子理事長）の年長組、年中組の園児13人が市役所を訪れ「毎日のお仕事ご苦労さまです。これからも頑張ってください」と職員らに感謝の気持ちを伝えました。

園児たちは、手作りのカレンダーとシクラメンの鉢植え、お菓子をプレゼントした後、鍵盤ハーモニカの合奏を披露しました。福島市長は「皆さんが仲良くいっぱい遊んだり勉強したりできるように頑張りますので、先生の言うことをよく聞いてください。風邪をひかないように気を付けてください」とお礼の言葉を述べ、プレゼントを手渡しました。

黒滝まささん100歳長寿おめでとう

黒滝まささん（稲垣町）が10月28日、満100歳を迎えられ、入所している安住の里で長寿を祝いました。

まささんは大正１年生まれ。25歳で上京し、東京都内の小学校で長年教職に就いていました。平成15年に安住の里に入所。毎日施設内を散歩するのが日課だそうです。

この日は、市社会福祉協議会の林嗣郎会長が「これからも長生きして地域のために昔の話を聞かせてください」と祝辞。松橋福祉部長が顕彰状と花束を手渡すと、まささんは「皆さんの愛情に支えられここまできました。本当にありがとうございます」と大きな声でお礼を述べ、入所者らから大きな拍手を浴びていました。

100歳の誕生日を迎えた黒滝まささん（前列中央）

読書の楽しさに触れる

絵本の読み聞かせを楽しむ子どもたち

地域における読書活動を推進しようと11月３日、松の館で「つがる市読書まつり」が開催され、親子連れら多くの市民が読書の楽しさに触れました。

読書まつりでは、はっぴーすまいる、つがる野文庫の会、野花菖蒲の会、おはなしサークルおひさま、稲垣読書愛好会の会員が絵本の読み聞かせや紙芝居、昔ばなしを披露。参加した児童たちは熱心に聞き入っていました。また、図書室の廃棄本のリサイクルコーナーでは、来場者がお気に入りの本を探し求めていました。会場には工作コーナーも設けられ、来場者は読書の合間に、歩くつがーるちゃんのからくりおもちゃの工作を楽しんでいました。

森田中学校で人権教室

11月13日、森田中学校で全校生徒134人を対象に人権教室が行われました。これは命の大切さと他者への思いやりの心を育んでもらおうと五所川原人権擁護委員協議会つがる部会（小笠原金美会長）が主催。この日は市の人権擁護委員５人が同中学校を訪れました。

教室では、人権啓発ビデオを見ながら、いじめ問題について考え、黒滝清昭委員が「人間は誰もが幸せな人生を送る権利を持っています。自分を大事にすると同時に他者を大切にしましょう」と呼び掛けました。生徒たちは真剣な表情で話を聞き、最後に生徒会長の原田朋也君（３年）が「いじめのない学校生活を送ることを誓います」と宣言しました。

黒滝委員（右）の話に耳を傾ける生徒たち

相撲の楽しさを体験

ぶつかり稽古を体験する参加者

10月28日、稲垣体育館で市体育協会主催の相撲教室が行われ、市内小学生26人が相撲の基本を学びました。

この日は、つがる相撲クラブの越後谷清彦監督と選手３人（斉藤悠世君、笹森睦生君、鳴海旭十君）が講師を務め、越後谷監督は「相撲の基本である四股は足腰を鍛え、他のスポーツにも応用できる」と説明。参加者は足を上げてバランスをとりながら掛け声とともに四股を踏みました。その後、ぶつかり稽古を披露し、参加者も懐めがけて飛び込んでいました。藤田日菜乃さん（稲垣西小４年）は「ぶつかった時の筋肉にびっくりした」と話していました。